(1) 68年ストライキの諸特徴

① 6/15－6/28－10/8－10/21斗争に現われた事態
6/15斗争以降、関西の、とりわけ大阪の斗争に大きな転換がある。

(イ) 6/15斗争を契機に、10/8、10/21斗争で明確にベトナム反戦＋反安保」ということ斗争の真の転換と、大衆の反安保意識を巨大な斗争に組織している。

(ロ) エンタープライズ以降の情勢と、6/15－10/21斗争の過程で、反戦＝全学連が、社共から独立した「独自の政治斗争部隊」ということを登場し、実質的に反戦斗争を領導している。
更に、反戦＝全学連は、[illegible]と対決する斗いの中で、政党的政治斗争の形成の芽を作り出してきた。この斗いの中で「反戦活動家」への処分反対斗争の中で、この政党政治斗争の発展と、それへの我々社学同の結合の環を良い出し、労働者の工場占拠と結合した社学同の街頭戦を、ソヴィエトへの発展の芽ということ点、反戦と全学連の新しい質の結合＝街頭戦をだけでなく＝ということ点をこしかねばならない。

(ハ) 各政区、各学園の斗いを集約と、6/15、6/28、10/21と三度の御堂筋斗争を実現し、関西の政治集会ということ首都の防衛行方、首相官邸への反戦中核と並んで「御堂筋占拠」も斗った。
この斗いの中で、6/28斗争で、関西で「組織された暴力」も初めて公然化され、10/21斗争では万余の大衆と共に社前隊を突破と、国家権力の支配能力の限界をあばき出した。
更に、国家権力はこれらの全部の中で、強圧の主要な環を日米の社共、とくに日共から、革命的左派に転換し、騒乱罪適用を狙い、社前隊の強化、長期拘留、保釈金つり上げ等の弾圧を強化し、防衛庁内自衛隊の武装と治安対策をもはじめに自衛隊の治安出動での左派の粉砕を、全社会の帝国主義的再編と同時に、権力の再編の中心ということ狙っている。

(ニ) この斗いの過程で、諸党派の活動と分解が、一挙に10/8以降の局面の中で一反撃行こた。社会党は、反戦青年委員会の斗いを圧殺しようと必死になり、大阪総評を中心に反戦＝全学連による御堂筋占拠を中心とした反戦斗争の高揚の後からついて行こうとする部分の反対に出合い、反安保実行委員会からの革命的左派の叉出こ決定化とけれにかれているが、左からは革命的左派の反戦斗争、右は同盟の帝国主義的再編の進出と、左右への分解は一反産出されるる。日共は自らの革命戦略の破産へ社共共斗での民主連合政権→共産党政権が社会党の分解の中で破産こと、全学連＝反戦の斗いが、民青の下部での[illegible]の中で、明確に反革命として登場と始めた。東大斗争での武力対決、法大のバルト斗争は、同大、全大での対決、阪大斗争内での斗争破壊ということ関西でも表出こ、我々は日共反革命を粉砕こと前進させねばならない。とくに、日共は全学あげて反トロキャンペーンでもって社会党のソ切ろうとこころ、労働者の間で、東大斗争の反トロ宣伝ビオルズ、全関西の規模で党派斗争を全面的に行わねばならない。
学生運動に於いては、関西全域、とりわけ京都、大阪に於いて、日共の反革命化と、我同盟を中心とする革命的左派の間で、情況の進行についていけず、右政派のボス落伍者しい。
更に、右翼が「オ3の学生運動」を言いつつ、関西学使を形成こ登場こ、きた事は、権力の再編の進行と共に、ファシズムへの露はらいとこの位置を持とうとこころおい、これも粉砕の対象である。

② ASDAC斗争 ― 反革命同盟、基地斗争の優待こた物。
第一期斗争の基調を我々はASDAC斗争に置いた。このASDAC斗争での問題点の特徴は、基本的に次のとうり。

(イ) 3/31、ジョンソンの和平提案 ― パリ会談の中で、ベトナム反戦斗争は全国的で分解をとけ、和平派、反米反戦の拡張に対し、小反対運動を形成した。この中で、我々はASDACを斗争を大衆的に展開と、プロレタリアートの斗いの真をベトナム反戦→帝国主義の侵略 ― 反革命こと対決するものへと高め上げた。帝国主義の不均等発展に基づく市場分割戦争この侵略を実現する反革命戦争社社 ― 日米安保、NATOとこと、日帝の安保の内実との対決へと、「斗いの質」を発展させた。
更に、他党派が3/31和平会談以後、分解こしている間に、唯一ASDAC斗争を「大衆的実力斗争」とこと展開こ(6/21カルチェラタン斗争、6/28斗争、10/21斗争)へ至る最大斗争を登場こ抜いた。

(ロ) これらこのASDAC斗争は、ハーニン帝国主義に立脚こ、不均等発展論を基礎に置き各帝国主義の対立を考察こ、「各帝国主義の侵略 ― 反革命と対決する」一日革命主義的不安分性を有こ、いた。
更に、帝国主義の不均等発展に注目こ、各帝国主義の競争戦＝侵略との対決を主張する一方、帝国主義に注目された労働

者日家の政治（ソ連のチェコ侵入、中共の文革）に現れた日本政治の中で、又世界市場の分断を引きのばすために、日本的なロレタリアの団結と階級闘争を粉砕する反革命同盟と対決するこいのネ交分性を有していた。それは「但田闘争の中核派への立ちあがれ」として現出した。こうしてそれは、反戦＝全学連の自治区連帯攻撃闘争として神戸、八尾で実践的に対応していたのである。

(ii) この矛盾は爆発したのが10月全学連大会である。10、8羽田闘争以降の大衆闘争は、安保を焦点に戦略的展望を奪われ、若干後の戦略を大衆闘争にそのまきもち込み「大衆闘争の分断」を進行した。この高揚での統一戦線は、一党派の大衆の囲い込みに対し、反帝統一戦線として「安保粉砕＝日帝打倒＝世界革命」に向け、権力との対決と、他党派との戦略闘争＝党派闘争としてプロレタリアートの反撃を実現するのもとこで形成されず、我々盟の戦略の大衆闘争への持ちこみ＝戦略的実践＝全学連大会の分解ととこで結果した。

こうして、これらの苦悩の中で、我々は「理論的整理」を次の点で勝ちとった。(i)帝国主義論と同時に、現代帝国主義論を押さえられながらも帝国主義社会にも影響を与える労働者日家の一部と、現代世界、(ii)統一戦線を反帝統一戦線として確定し、一NO2 市場の分断と社会政治的危機、又この恐慌を先どりした帝国主義者の侵略＝反革命の強化とその内在化＝国内矛盾にしく闘争。それは10／21闘争の基調を形成した。それは10／21闘争をめざされ、右翼闘争の基調を形成した。それは10／21闘争として爆発した。

(iii) 10／21闘争を中心に、我々は基本的に次の結論に到達している。

10／8羽田、11／12羽田、エンプラ闘争の中で形成された「組織された暴力と具体化された国際主義」を、第7回BUND大会で「世界同盟革命」にまとめた。国際主義の環＝首日帝国主義打倒を「侵略＝反革命」と対決して実践していく闘。これをASPAC闘争＝全学連大会の問題点の上に立って、世界同盟革命を「世界革命戦争」で国際的なロレタリアの団結を出発に実現する闘。その中心を世界反帝統一戦線＝国内反帝統一戦線として形成し、その中軸に世界未来を置き、労働者日家をもとに再編する闘で、スターリニズムの国際的解体を実現していく。以上を指導する世界党の建設の作業に着手する。これは8／3戦旗誌文としてきとられた。更に10／21闘争の中で、世界革命の一環たる日本革命の型を「中央権力闘争とマッセンストライキ」として確定し、一般的でネスト論＝産別主義では革命に到らない事、中央権力闘争とマッセンストを武装蜂起に集中していく事。

(iv) 10／21闘争の爆発と、11／12闘争での権力の強化、11／12東大闘争での日共の反革命としての登場の過程で、この戦略的組織的力量をかけて闘われている。これに応える事は一般的に「組織強化＝労働者組織化」を言うのではなく、現在闘われている問題との関係で「組織強化を組織方針」として確定せねばならない。それは(a)、中央権力闘争とマッセンストとして確定した日本革命の型を実現すべく、地域占拠へ至る地区政治闘争形成に向け、地区細胞の建設→工場占拠による街頭戦の展開への「マッセンストの現信」の展開として闘われている。これには、我々は「植田、ナスの闘争」の経験から、反戦闘争の転場への優先と工場占拠、これへの「全学連の組織された暴力の結合」をとして、又東京を中心に「中小企業の闘争」での工場、転場占拠」をとして経験している上に、第基産業＝大工場での全学細胞建設の作業の中から明確化していかねばならない。

(b) このマッセンスト実現のもう一方の決定的環＝世界的危機の確定をとり一段、緻密化していかねばならない。その視点は、帝国主義の全者的破綻＝恐慌による「IMF統一市場の分断と社会政治的危機、又この恐慌を先どりした帝国主義者の侵略＝反革命の強化とその内在化＝国内矛盾にしく闘争。それは10／21闘争の基調を形成した。それは10／21闘争をめざされ、右翼闘争の基調を形成した。それは10／21闘争として爆発した。

(iii) 10／21闘争を中心に、我々は基本的に次の結論に到達している。

10／8羽田、11／12羽田、エンプラ闘争の中で形成された「組織された暴力と具体化された国際主義」を、第7回BUND大会で「世界同盟革命」にまとめた。国際主義の環＝首日帝国主義打倒を「侵略＝反革命」と対決して実践していく闘。これをASPAC闘争＝全学連大会の問題点の上に立って、世界同盟革命を「世界革命戦争」で国際的なロレタリアの団結を出発に実現する闘。その中心を世界反帝統一戦線＝国内反帝統一戦線として形成し、その中軸に世界未来を置き、労働者日家をもとに再編する闘で、スターリニズムの国際的解体を実現していく。以上を指導する世界党の建設の作業に着手する。これは8／3戦旗誌文としてきとられた。更に10／21闘争の中で、世界革命の一環たる日本革命の型を「中央権力闘争とマッセンストライキ」として確定し、一般的でネスト論＝産別主義では革命に到らない事、中央権力闘争とマッ

第二章 [illegible]

第一節 「学同」の建設に関する

④ 社学同の建設について。

(1) 帝国主義の侵略＝反革命が全面化し、70年安保を中心に強化され、これと対決する反戦闘争を全人民の先頭に立ち、我々は巨大な反響として大衆闘争を形成してきた。この反戦闘争がベトナム反戦→日韓のアジア侵略と反革命＝70年安保との対決の過程の過程で、直接的には10／8ショック以降闘争を契機に、大衆闘争は戦略的展望が要求されている。つまり70年安保闘争の日本革命における位置と意味を明確にしなければ、闘争が前進こない情況が到来した。

戦略をめぐる論争の流動と分解が進行している。又、これを反映して、闘争の中で自らの基盤を要求に要求する活動家＝大衆的流動＝分解＝動揺を開始している。

一方、帝国主義者は、反戦闘争の発展が革命闘争として前進し、帝国主義の命運を断つ内容を持つが故に、権力の反動と暴力を強化し、全社会の帝国主義的再編と同時的に「強化」を自衛隊の治安出動を目ざして展開こ始めた。この権力の強化強化の中で、強化を直接的に受ける「先進的活動家」の分解が急ピッチである。

この中で、一般的大衆闘争は情況は切り開けず、大衆を集約し、結集した活動家と政治的展望をもつていく事が出きず、党に組織された、革命に向け、革命の中での位置を明確化した闘争にならず、このみ問題を安破性集さるとい又これらの闘争の中で、活動家＝大衆を革命に至る戦略的展望で武装する事によってこのみ党を強化し、闘争を拡大できる時なのだ。

[illegible]

(2) 敵権の闘争に対して[illegible]70年安保への帝国主義者の反革命量的力強化策動への大衆の反安保意識を我々は[illegible]ム反戦闘争の発展の中から形成してきた。

この闘争の中で、社学同の建設が非常に立ちおくれている。④沖縄大阪新支部、[illegible]新支部が建設されている。これらの全てを同盟の中心に集中し、拡大される組織集中力の弱さ。⑤ C、K、[illegible]の三班東支部の低調。これは直接的契機は「東京移転」ということであるが、その問題は「同盟が全国的組織化されていない事」移転問題の体制と理論を支える[illegible]の未成分性」ということである。

⑥ 全同盟の[illegible]集中[illegible]の組織強化の低下。これも[illegible]集中的に同盟の問題。⑦ 以上の[illegible]同盟内の[illegible]強化による[illegible]と表現されている。

(3) 我々はこの立ちおくれを早急に克服せねばならない。そのため「社学同の位置」をきず明らかにする事である。社学同は「組織された暴力」ことこと日家権力との対決の最先頭に立つ事。当面、70年安保闘争では[illegible]隊を突破し、治安能力を粉砕し、自衛隊の治安出動を我々の側へ引き出す事。オワに、この日家権力の対決と突破が、70年安保闘争の中での位置と、日本革命＝世界革命の中での意味を戦略的に明らかにし、オワに、現在の資本制社会の一切の矛盾を止揚し、共産主義社会建設に向けた意志一致と、その全過程を導く為には「きずボルシェヴィキ日家林和の完全な粉砕」を必要としてあり、この全過程を導く党＝BUNDに結集され、社学同が日家林和粉砕の先頭に立つ事を明かにする事。つまり共産主義へ至る革命の全過程の中での、日家権力との対決の位置を明確化する。

以上を全同盟的に武装し、又帝国主義の暴力的強化で動揺している先進的活動家を思想的に一致させ、活動に確固たる信念を与えていく。

(4) 具体的には、①沖縄大学の強化、②組織的集中力＝学習対抗運動力の強化、③学習会活動の拡大を中心にして、[illegible]目～3月の間、組織強化に全力を集中する事。

[illegible]へ詳しくは日本[illegible]

(四) 1月～4月方針、

1月7日、下田米日大使の「沖縄」発言をめぐって、政府の [illegible]

[illegible]

備である。

[illegible]

本日の集会の意義について

1 はじめに――安保決戦段階への進撃を開始せよ！

全国の斗う労働者、学生、市民諸君、

あの六七年十・八羽田斗争以来、新しい時代を切り開いてきた日本階級斗争は、その一貫した目標であった70年安保をめぐって、11月首相訪米に至る一つの決戦段階を迎えようとしている。我々はこの二年間、权力との連続的な激斗の中で自からを世界階級斗争の主体的一環へと高め、全学連・地区反戦の確乎たる戦斗組織を、更には全共斗や労働者共斗会議の新たな斗う組織をつくり出してきた。と同時に、帝国主義权力もまた、自からの動揺する体制を維持し、侵略と抑圧と反革命を強行すべく暴力的な弾圧を築き上げ、増々激しくその矛先の斗う労働者学生に集中してきている。

だが斗う労働者、学生諸君、今我々が迎え始めている安保決戦段階は、この二年間よりもはるかに大規模で深くかつ鋭い攻防戦となるであろう。又我々は総力を上げて、より広汎な人民の、帝国主義とのより深い対決を、敵の弾圧に倍する斗いをもって切り開いていかねばならない。今この進撃の時が訪れている。4/26－28斗争でもって、11月訪米阻止に向けての、安保決戦段階への怒濤の進撃を開始せよ。

2 我々は何をたたかい獲得してきた

この進撃を開始するにあたって、今一度我々の斗いが獲得してきたもの、この斗いが現にたっている地平を確認しよう。第一に我々はベトナム人民の英雄的革命戦争に呼応する斗いの中で、久しく打ち捨てられていたプロレタリア国際主義を再生させ、アメリカ、フランス、ドイツ等、全世界の階級斗争との同時性、同質性を獲得し帝国主義に対決するプロレタリア人民の最も鋭い武器を鍛え上げてきた。とりわけ昨年8月の国際反戦集会でもって、NATO・安保粉砕・ベトナム革命勝利を確認し現に今それは、本年2～3月のヨーロッパの反NATO斗争、そしてベトナム革命戦争に呼応するラオス、タイ、パキスタン、インドの斗いとして実現されている。全世界的な階級危機の始まりは、このプロレタリア国際主義を更に発展している。第2に、この国際主義の内実は、自国帝国主義打倒をめざす労働者階級人民の斗いとして形成されなくてはならず、我々はこの斗いを、安保斗争の全人民的政治斗争としての展開として形成した。

昨年10/21の防衛庁――新宿――御茶ノ水占拠斗争は、70年安保として体現される帝国主義政治総体と、日本帝国主義权力そのものに、全人民の実力でもって迫っていく斗いを再現し、そこに深い亀裂の楔を打ち込んだのであった。第3にこの政治的流動は、同時に市民社会深部への流動へと受け継がれ、帝国主義社会の深部から、その帝国主義的再編と衰亡を打ち砕き、权力に迫っていく永続的斗いをつくり出した。1/18、19東大安田死守戦を頂点に、一挙に全国に波及した学園斗争と、労働者階級の工場占拠や大衆ストライキの開始は、帝国主義支配体制解体への永続的斗いの真と共斗会議運動としての組織――運動形態に於て階級的団結の形成への全人民的普遍性を増々明かにしている。

第4にこの階級斗争の新しい時代の中から、この階級斗争の最も主軸的担い手として、全学連・地区反戦を中心とする反帝統一戦線を形成し、戦後長期にわたって続いてきた民族主義的、議会主義的統一戦線を遂にのりこえて進む斗争主体が、日本階級斗争の中に確乎として登場したことであった。10/21の斗い、そして東大斗争、及びそれ以降の全ての斗いはこのことを明かにし、帝国主義者の光栄ある憎しみを一身に受けとめると共に、日和見主義、排外主義の反革命的本質を増々鮮明にあばき出してきたのである。

我々は以上の点を誇りをもって確認することができる。だが我々が今迎えようとしている局面と、斗いにとって要求され始めている問題は、はるかに広くかつ深い。4～11月の斗いは、これ迄の斗いの直接的延長上には設定されえない。異なる飛躍が必要なのだ

3 朝鮮危機と日米帝国主義――70年代安保攻防戦

昨年3/31ジョンソン声明をもって始まった戦略再編は、昨年ニクソン登場を至て本年のニクソン訪欧をもって具体的に開始され、国際政治過程に登場してきている。

帝国主義の世界の再分割が一方で中進国を圧迫に押し上げ、他方ではアフリカへと拡大している。又後進国危機として開始された危機の永続性は、今やパキスタン、インド、韓国等の中進国を明確に把え始めている。更には「労働者国家」群内の矛盾と階級闘争は国家間対立・武力衝突という形態にまで転化している。これらの絡み合いに於て展開される帝国主義の世界戦略再編と国際政治危機の形成は、一つはベトナムからラオス、タイ、パキスタンへと広がっている武装解放闘争と帝国主義の侵略の戦場である東南アジアに於て。二つは米、英、仏、ソの石油利権をめぐる利害関係が、米帝のアラブ支配とアフリカ再分割の先兵となっているイスラエル、アラブ対立と結合する中近東に於て。三つはドイツのNATO中央軍事と、独―仏対立、英―仏対立、米による英仏協調のヘゲモニーなき均衡、他方に於る東欧体制の動揺とソ連の軍事侵出、この両者が拮抗する中欧に於て。四つは韓国の進行する政治経済危機と武装解放闘争の波及と中国、北朝鮮の存在、これに対する日米の侵略反革命体制の再編として緊張をたかめている極東に於て。

この全世界に連なっている戦略再編と政治危機形成の主要な一環である朝鮮―極東危機と日米侵略反革命体制の再編は、国際階級闘争の、とりわけ日本―アジア階級闘争の焦点として登場し始めている。本年3月のフォーカス・レイナ作戦は、米本土国の投入体制と沖縄前線基地と自衛隊の結合を明かにし、ポラリス配置と共に米帝の極東戦略を示している。そしてそれは同時に、日帝のアジア海外派兵＝軍事膨張を前提とした戦略であり、朝鮮危機をめぐる日米共同軍事行動として具体化されようとしている。

他方、日帝は既に昨年末ジャワ島での自衛隊演習権獲得、本年1月マラッカ海峡での海上自衛隊合同演習、急増しつつある沖縄への自衛隊派遣と日韓米合同演習、軍事膨張への道を築いてきた。その延長上に日帝の軍事力を軸とするPATO構想が設定されている。まさに70年（70年代）安保とは、この朝鮮危機を焦点とする、日帝のアジア海外派兵＝日米共同軍事行動を環としてあるのだ。日帝のアジア海外派兵＝日米共同軍事行動粉砕を、日米帝国主義打倒に向けて、日―米―アジア階級闘争の結合でもって闘い取っていくことを明確にし、その闘いとして安保粉砕闘争を我々は闘っていかねばならない。

既に日帝ブルジョアジーとその权力は、自らのこの戦略的方向を確定し始めている。そしてその下に、例えば靖国、元号法案をASPAC―PATO体制の方向へと再編し、又国民統合に向けて沖縄の「核抜き本土並み」返還を折り込みつつ、日米帝国主義の自由に使用しうる侵略前線基地として確保し、ポラリスを配置することを野望している。そして他方では、大学内政治活動の圧殺→全学連粉砕、労働力等の破壊→総評解体をおし進め、暴力的に政治的民主主義を圧殺し、自衛隊の治安出動を準備するという、体系だった治安弾圧を計画している。又資本家集団自身が、「安保をめぐって労働者を転換でイデオロギー的に組織し、労使共同戦線による労使関係を新たな」（関経連）という気狂いじみた政治的組織化を開始しようとしている。まさに今我々は、朝鮮危機―日帝のアジア海外派兵＝日米共同軍事行動をめぐって、政治的決戦を迎え始めているのであり、69年4月から11月に至る安保決戦段階の闘いが、70年代前半への永続的な政治攻防戦への連続的出発点にあることを確認しなければならない。そしてその闘いは、名実ともに日―米―アジア階級闘争の結合を要求し、我々自身の闘いも日米帝国主義打倒に向けてそれを主体的に獲得していくものでなければならない。まさにその環として沖縄闘争があるのだ。

4. 日米帝国主義の極東軍事戦略打倒の要＝沖縄闘争の爆発をかちとろう。

沖縄2/4ゼネストの昂揚と挫折は、日本階級闘争に新たな課題をつきつけた。2/4ゼネストを押し上げた沖縄労働者人民の昂揚は、沖縄人民の汎ゆる苦悩の根源としての、帝国主義の世界戦略に於る前線基地化というその下中的、世界的位置からの解放を内包する、基地撤去を前面に掲げるにそった。だが、この要求と闘いは一度び沖縄をやぶや、具体的対決、打倒対象として登場してくる米軍政の弾圧の前に、屋良政权及び日和見主義指導部は屈服し、本土佐藤政府の沖縄政权返還論＝一体化政策へと妥協し、融着していった。しかし、この東重な闘いを通して、沖縄人民の闘いは、基地撤去、反戦闘

争、安保斗争を増々鮮明にし、自分らの斗いを通して、帝国主义的本土の変革をも展望するに至っている。沖縄人民の斗いは、本土所級斗争に明確に回答をつきつけている。本土の民社はこうした中で、社・共、総評も又、斗いを組織することではなく、ゼネスト中止に奔走し、そのために沖縄オルグを派遣し、自らも又佐藤政府の一体化政策へと融着していったこと、そして我々自身もそれをこえて斗いを形成しえなかったことである。

本土所級斗争に於る沖縄斗争は、もはや帝国主义的本土の上だけで、領土主权問題では絶対にありえない。帝国主义世界戦略の前線基地化として、歴史的に受けてきた三重の支配と抑圧から自己を解放しようとする沖縄人民の斗いがつきつける課題に応え、我々も又帝国主义的本土そのものの変革の斗いと沖縄人民の斗いとの結合による、日帝打倒の所級的団結の実質性を斗い取っていくことこそめざさなければならない。と同時に、この斗いは米帝国主义打倒をも不断に展望するものとして、アメリカ所級斗争の結合を追求していかなくてはならないし、この日米両帝国主义打倒の前提条件を不断に形成している。ベトナムを初めとする民族解放武装斗争との結合を追求していかなければならない。まさにそうしたものとして、我々は日米両帝国主义打倒をめざし、その展望を朝鮮危機をめぐる日米共同軍事行動＝日帝のアジア海外派兵を日（本土）－沖縄）－米－アジア所級斗争の結合でもって粉砕していく斗いで切り開いていく方向の下に、その最大の環、現在的斗いとして、沖縄斗争を沖縄基地撤去－米軍政打倒、日帝の一体化政策－アジア侵略前線基地化阻止を斗い取っていく斗いとして展開し、本土－沖縄の同質的所級的団結を獲得していかねばならない。沖縄問題の要は、まさに急ピッチに進む戦略再編の中に於る日米帝国主义の前線基地撤去にあるのであり、その要求＝国際的結合の下に日米両帝国主义权力に鋭く迫り、その侵略及革命体制を打ち砕いていくことにあるのである。プロレタリア国際主义は抽象的観念ではなく、現実の所級斗争の内実として問われている。そしてそのことが、权力をめぐる四民的分裂と新たな結合と不可避的に結合し始めているのだ。4/28斗争は本土に於る真の沖縄斗争の第一歩を、選挙的にかち取らねばならない。

5バリケードストライキ斗争を
4/26（全関西京都）28（首都）に結集
し中央权力斗争－マッセンストの創出を！

以上の政治的方向を、我々は4/26及斗争の展開爆発でもって日本所級斗争の中に明確に刻印しなければならない。既にこの間の学生斗争、春闘が示している如く、個別斗争それ自身も又、今や权力の直接的発生との不断の対決へと至っている。しかしその個別性の故に深く強い対決を斗いつつも各個撃破され、一歩後退を余儀なくされてきた。とのことが増々、帝国主义权力に対する全人民の集中的斗争＝政治斗争、中央权力に迫る街頭行動を要求し、それによる政治的力関係の流動を要求している奪われた個々の民主主义は集中的政治斗争によって一挙に奪い返さねばならない。4/28斗争は、この間の首都に於る行動隊による戒厳令的情勢下と右翼の手口の能個を打ち砕き、政府权力中枢に迫っていく圧倒的な、そして徹底的な斗争としてかち取らねばならない。安保－沖縄斗争の全人民の力量を集中し、その最大の決定的分岐点となさねばならない。11月に至る帰すうはこの4/28斗争がまずもって決するであろう。そしてこの斗いの力でもって、再びバリケードストライキ、占拠斗争を発展させ個別斗争を全人民的政治斗争へと合流させ、その流れの斗いを、11月に向けて圧倒的な中央权力斗争－地域マッセンストの創出へと実現していかねばならない。4/28首都の斗いに全力を上げて結集せよ。そしてその突破口を4/28全関西闘争統一集京都斗争でもって切り開き、4/28斗争の内実をまずもって形成せよ。全関西の全学連、全共斗、反戦青年委会の統一的な安保斗争部隊を形成し、4/28－11月を斗い抜く戦列を打ち固めよ。4/28斗争に結集し、5千の隊列で京都を埋め尽くし、4/28に至るまで結集する10万の隊列にかわろう。

我々はそのことによって自分らを所級斗争の新たな担い手として飛躍的に変化しなければならない。反帝統一戦線をより広く、より深く、より固く発展させよう。全学連の統一と全学連と全共斗の統合でもって、全学連の大衆的合流を獲得せよ。地区反戦を大衆的統一戦線斗争体系へと発展させ、全国的結合を獲得せよ。反帝統一戦線の中に鉄の全人民的団結を創出せよ。

安保－NATO粉砕、ベトナム革命勝利の国際反帝斗争を前進させよう！

十一月佐藤訪米実力阻止！

沖縄斗争勝利！

四月

4・26～4・28 闘争の要項

A・4、26全関西労学総結集闘争

全関西労学総決起集会

6時、京都円山公園音楽堂

7時30分、デモ出発→円山―四条―市役所前

〈呼びかけ団体〉

関西地区反戦青年委員会議、京都反戦青年委員会

京都府学連

〈参加団体〉

大阪府学連、京大全共闘、立命大全共闘、京都府立医大全共闘、和歌山大全共闘、関学大全共闘、兵庫県学生反戦連合、阪大港湾労働者共闘会議、関西各地区反戦、大阪市大全共闘（予）、神戸大全共闘（予）

26闘争終了後、全部隊東京出発

B・4・28安保粉砕、沖縄闘争勝利首相官邸占拠闘争

霞が関攻撃、首相官邸占拠

〈詳細追って連絡〉

戦闘的労働者、学生の総力を

全国闘争の中軸―首都の闘いへ！

26闘争の規模五千

京都府学連二000、大阪府学連三00、京都全共闘一000、阪神関全共闘五00

関東地区反戦五00（含京都地区反戦二00）、他西日本からの結集

28闘争規模 全国総結集十万